

RUSSIAN-EURASIAN ECONOMY

# ロシア・ユーラシア経済

— 研究と資料 —

2008年 4月号

No. 909

## 《特集》ロシア農業の新動向

---

〈特別寄稿〉

ロシア農業における不動産金融の再生

アリハン・キビロフ

ロシア農業の現状と新しい農業政策

岡田 進

〈資料〉

「農業の発展について」の連邦法

〈資料〉

「2008-2012年の農業発展国家プログラム」

---

〈書評〉

奥田 央 編 『20世紀ロシア農民史』

足立 芳宏

〈書評〉

マルコルム・ウォーナー他著、加藤志津子監訳  
『市場経済移行諸国の企業経営』

音羽 周

---

〈書評〉

奥田 央 編

『20世紀ロシア農民史』

(社会評論社、2006年)

足立 芳 宏

かつて冷戦期において、「ソ連農業史」を語ることは、戦後世界に普遍化したスターリニズムの「本質」を歴史的に論じることと同義であった。国家と党による「全体主義」の成立、あるいは国家主導の強行的な社会主義的工業化のいわば裏面史として、集団化という農業の強制的な国家統合過程のありようが分析され記述されたのである。冷戦期にはそれはきわめてアクチュアルな問題領域ですらあったといえよう。

しかし21世紀初頭のいま、「ソ連農業史」を語ることは、もはや「社会主義」を語ることでなくなった。本書のタイトルが象徴しているように、「ソ連農業史」は「20世紀ロシア農民史」に組みかえられたのである。と同時に、本書序論において、「モラルエコノミー」、「パターナリズム」、「脱農民化」などの近年の西欧農民史研究の用語が多用されているように、この組みかえは分析言語の変化をも伴うものとなっている。こうしたパラダイム変化と、なにより史料アクセス簡便化による実証水準の飛躍的上昇によって、どのような新しい「20世紀ロシア農民史」像が、いま作られつつあるのか。日露における中核的な近現代ロシア史研究者18名よりなる共同研究の成果として刊行された700頁に及ぶ本書は、以上のような問題関心をいだけ読者に対して、現時点における世界水準の回答をあたえようとしたものである。

本書の構成は、序論を含め20本の論文からなっている。

序にかえて 20世紀ロシア農民史と共同体論 (奥田央)

20世紀ロシア農民の歴史的記憶 (イリーナ・コズノワ)

ストルイピン土地整理事業と首都圏の農民 (ドミトリー・コヴァリョーフ)

20世紀初頭ロシアにおける農民信用組合—モスクワ県を中心に— (崔在東)

1918-21年のウクライナにおけるマフノー運動の本質について (ヴィクトル・コンドラ  
ーシン)

農村統治とロシア都市—県市合同の分析 (1918-1921) (池田嘉郎)

共産主義「幻想」と1921年危機—現物税の理念と現実— (梶川伸一)

ヴォルガ河に鳴り響く弔鐘—1921-22年飢饉とヴォルガ・ドイツ人— (鈴木健夫)

共同体農民のロマンスと家族の形成 (広岡直子)

ネップ期における農村壁新聞活動—地方末端における「出版の自由」の実験—(浅岡善治)  
穀物調達危機と中央国土農村における社会政治情勢(1927-29年)(セルゲイ・エシコフ)  
農村におけるネップの終焉(奥田央)

1928-1931年の赤軍における農民的気分(ノンナ・タルホフ)

ロシアとウクライナにおける1932年-1933年飢饉。ソヴェト農村の悲劇。

(ヴィクトル・コンドラーン)

1920年代-1930年代のヨーロッパ・ロシア北部におけるコルホーズ・農民・権力

(マリーナ・グルムナーヤ)

20世紀前半のウラル地方における農業の変容(ゲンナジー・コルヒーロフ)

コルホーズ制度の変化の過程 1952年-1956年(松井憲明)

1960年代-1980年代のロストフ州農村における労働力の可能性。行政的調整の試み

(ヴィターリー・ナウハツキー)

ロシアにおける土地流通・土地市場—実態理解のための若干の考察—(野部公一)

移行経済下ロシアの農村における貧困動態—都市の貧困動態との比較から—(武田友加)

本書は、全体としてみれば、日露における歴史学の文化の違いはもとより、各自の問題意識、研究者としての来歴、政治的スタンス、さらには各テーマにおける研究蓄積の濃淡などにおいてそれぞれの相違は大きく、必ずしも体系的な仕上がりになっているとは言い難い。各章で描かれる農民像ひとつをとってみても、一方で共同体コスモスを生きる農民像があると思えば、他方で市場化を生きる農民像が前面に押し出される場合があり、さらには飢餓と戦争に苦しむ「悲惨な農民」像が描かれる。扱われる時空の差異を考慮しても、その像はなかなか一つに結ばれないのである。とはいえそれは本共同研究の未完成さというよりは、ロシア農民史の多様性を反映したものとみなすべきことがらである。かように20世紀のロシア農民の史的経験は、なお想像を超える奥深さを内包しているのである。

私は近代ドイツ農業史研究に従事する者であり、本書の研究領域については門外漢だから、こうした多様性に配慮しつつ各個別論文に即した論評をなす力量など、もとよりもちあわせていない。さいわい本書には冒頭部分に共同体論を軸とした編者の奥田による秀逸な序論がおかれている。そこで、この奥田序論に刺激されつつ、また比較史的な観点を意識しながら、以下、①「農民共同体」論、②「集団化と共同体」論、③「国家と農民」論に絞って各論文を縦断する形で論評を加えてみることにしたい。

## ① 「農民共同体」論

20世紀社会科学にあって、近代ロシア農民は、なにより農民共同体論によって表象され続けてきた。マルクスの『ザサーリッチへの手紙』をもちだすまでもなく、たとえば市場社会

に適合的な個人主義規範をイギリス社会史の個性として理解しようとした A・マクファーレンにあって、その比較参照系たる非市場的な農民社会として具体的に表象されているのは明らかにロシア農村である（『イギリス個人主義の起源』1990年）。明言されているわけではないが、そこでは「共同体と近代」という二項対立図式が「ロシアとイギリス」に重ねられて論じられている。他方、英独仏の史的経験に基づきながら比較家族人類学として新たな「共同体」類型論を提唱したのが E・トッドであった（『新ヨーロッパ大全』1992（I）/93（II）年、他）。トッドは、父子関係（父子同居か否か）と相続慣行（分割相続か単独相続か）を指標にヨーロッパ家族モデルを四類型に分類したが、このうちロシア社会にわりあてられたのが、家父長的権威主義と平等主義により特徴付けられる「共同体家族」である。トッドの場合、近代主義の単純な二項対立は克服され、「20世紀社会主義」が歴史人類学的な枠組みで解釈された点に斬新さがあったが、しかし「共同体家族」の内容がロシア農村の史実に即して具体的に分析されているわけではなかった。

以上の問題関心からすれば、農民の性と婚姻を扱った広岡論文は大変示唆的な内容に富むものである。この論文からは、ロシア農村においては村の性と婚姻が他に類を見ないほどに集団的に管理され、このため性にに関する当人のプライバシーなどおよそ存在しえない世界であったことがわかる。この点が示唆することはかなり奥深い。第一に、ここにいう性の集団的管理は、「村」の婚姻規制の強さを意味するのではなく、むしろ村と家族の溶解を、極論すれば村の実態とはまさに「共同体家族」にすぎないことを意味する。第二に、こうした性と婚姻の管理こそは、早婚に基づく多産による人的資源の確保を可能にするシステムであるといえ、それは本書全体のテーマをなす20世紀飢餓に対する抵抗力の強さの秘密を解き明かすものですらある。第三に、ロシアに固有な非婚者や寡婦に対する賤民視に関する人類学的解釈をも与えていよう。このように、従来、ロシア農民共同体の特性は、もっぱら土地割替えを中心とする土地慣行に即して議論されてきたが、それだけでは不可視であった側面を広岡論文は明らかにしえたと思われる。

広岡論文が静態的な意味での共同体論の新展開であるとする、その動態的側面に焦点を合わせた論考が、ストリピン農業改革期をあつかったコヴァリョーフと崔の二論文である。このうちコヴァリョーフ論文は、ストリピン農政の近代性・合理性、およびフートル・オートブル農民経営を高く評価するのみならず、これがネップの全期間の土地関係までを規定するものとしている。これは「非市場的ロシア農民」像を裏返したような「企業的ロシア農民」論であり、その意味で、じつはベースに近代主義的な枠組みが措定され続けているのだが、こうしたスタンスは本書の他のロシア人研究者の論文にもしばしば見受けられるように思われた。他方、崔論文はこうした二項対立図式に立つものではなく、ストリピン改革による共同体の変質をふまえて、1909年以降に急速に進展する信用組合の発展に焦点をあてることで、農民社会の新たな社会的結合様式の可能性を探る内容になっている。特に無担保、

無保証の短期の小口金融が、1919年に至るまで未回収債権をだすことなく堅実に運営されているという指摘は、私には驚きであった。これはローカル経済圏を単位とした力強い地域資金の好循環があり得たことを雄弁に物語る。ただしここで崔の言う「信用組合にみる平等主義原則」がどの程度の史的可能性をもつものかは不明である。さらに、崔は論文の末尾において「共存と共生という原理は農民側だけではなく協同組合管理部や活動家、ロシア政府部内においても共有」されたと、近代化と国家と農民の牧歌的協調関係を唱っているが、これは国家と農民の絶望的な懸隔という本書全体の基調とはあまりにギャップが大きい。これらの点を意識してであろう、奥田序論は、とくにフートル化の意義に言及しつつ、その広がりやの限定性、およびフートル経営が家族分割に帰結する事例をあげることで、市場化モメントの積極評価に対しては事実上の軌道修正を加えている。

## ② 農業集団化と共同体

共同体をめぐるもう一つの問題は農業集団化との関わりである。この問題こそは従来の「ソ連農業史」研究の中心にあったといってよい。実は本書の特徴の一つは、奥田序論が端的に示しているように、共同体論を農業集団化論だけに限定しないこと、むしろ「20世紀ロシア農民史」全体を理解するキー概念とすることにあるのだが、とはいえそれはロシア農民共同体がいかなる形でコルホーズのなかに生き続けたのかというテーマの重要性をいささかも減じるものではない。しかしこの論点について実証的に論じられているのは、本書ではグルムナーヤ論文の第4節のみであった。しかもそこで記述されているのは、飢餓時における収穫物分配や住宅付属地割替に口数原理の適用がみられること、家族・友人を単位とするような労働組織形態のありよう、馬などのコルホーズ資産利用にある種の公私混同がみられることなど、いわば断片的な事実の羅列にすぎない。確かにこれらに村の平等主義的な原理の発現をよみとることは不可能ではないが、ここに何らかの主体としての共同体の存在を想像するのはやはり無理である。このためでもあろう、グルムナーヤはコルホーズの国家化の完成を1953年としているが、そこにいたるまでのコルホーズの社会権力編成の変化については「共同体的機能の残存」の程度を推し量るのみで、これが説得的に論じられているとは言い難い。戦時期については、コルヒーロフ論文がウラル地方を対象に、戦時の自給化（工業労働者およびコルホーズ員の副業的農業経営拡大）ともいうべき事実を明らかにしているが、コルホーズと共同体との関わりはまったく意識されていない。

実証的ではないとはいえ、このテーマについての理論的掘り下げを行っているのが奥田序論である。奥田は一方で集団化が共同体史の主要な局面の終焉であったこと、「共同体のコルホーズへの転化」という問題の立て方自体の抽象性を指摘し、かつ、編者としては異例だが、本書所収のエシコフ論文で主張される「スホードの自発的な集団化」論を根底的に批判したうえで、他方で、コルホーズと土地団体におけるテリトリーや成員の重なり、農民の

ミール観念の不変性、私的土地所有の欠如、さらには農民の飢餓対応の仕方のなかに、村落構造と共同体理念の連続性をみようとしている。しかし本書で描かれる暴力による破壊過程のリアルさに比べるとその説得力の乏しさは否めない。飢餓対応の様々な個別戦略も、広岡論文の視点からする再生産過程のありようが分析されているわけでもないので、どこまでロシア農民に固有な行動といえるか判断できかねるのである。

### ③ 国家と農民

共同体論における新展開もさることながら、本書の最大の功績は、なにより「国家と農民」論の領域において、その実態をより具体的に明らかにし、もってこの古典的テーマについて新たな局面を切り開いた点にある。

第一に注目されるのは、20世紀前半に繰り返される飢饉を扱った一連の論考である。まず、内戦期については、鈴木論文がボルガ・ドイツ人の手紙類を素材に1921/22年飢饉の実態をリアルに描いている。さらに梶川論文は、現物税導入過程の詳細な分析をとおして、農村の飢餓深刻化への対応として食糧税移行を理解する通説をネップ神話であるとして、これを解体している。ここで強調されるのは現物税が、実は「無貨幣社会の実現」という「幻想」にもとづくものであったということである。読者はボルシェビキにおいてフィクションがもった凄まじい力に驚愕しようが、同時にここにはロシアにおける「国家と農民」の絶望的な距離感が表現されているともいえる。コズノワ論文は、20世紀ロシアの「農民記憶」に関する論考だが、そこで論じられているのは都市から見た「他者としての農民の発見史」とも読める内容になっている。そもそもこうした問題設定はたとえば近代日本農業史では考えにくい。

穀物調達から集団化期における飢饉の実態を明らかにしているのがコンドラーシン論文である。この論文は「国家と農民」の対決図式による「ソ連全土の飢饉」という古典的視点からの叙述であり、「集団化の歴史記憶」の問題についてナイーブすぎるという批判を免れないが、非常措置から飢饉に至る過程が従来に比べより具体的に描かれている点は大いに評価できる。非常措置が飼料不足をまねくことで、劇的な家畜・牽引力の減少を通して穀物生産の累積的な縮小に帰結するありさまは、非常措置という失政の深刻さを物語るし、また、食糧不足が胃弱と代用食中毒を引き起こし500-700万人の死者を生みだすにいたる過程は、読者に20世紀途上国世界で頻発した飢餓問題を連想させるであろう。さらにまた、こうしたなかであえて飢餓輸出を続けたソヴェト国家の無感覚ぶりにも、上記の国家と農民の絶望的な距離感を感ぜざるをえない。1920年代末の中央黒土農民にみられたという戦争待望論-ソ連敗戦による解放願望(エシコフ論文396頁)-は、この距離感の農民の側からの表明である。

第二に、ではこうした暴力の源泉はどう理解したらいいのか。これについては本書では二つの論調が見受けられた。一つは末端党员アクティヴに注目する議論である。奥田「ネップ

終焉」論文は、既述のように「貧農による農村内暴力」論を基調とするエシコフ論文に対する批判を意識してであろう、農村コムニストたちに着目している。彼らは郷の中心に居住する若い有給の職員層である。非農民出自であるため反農民的で、かつ、きわめて興味深いことに、スローガンが理解できる程度の識字水準であったことが、彼らを先鋭化させたという。ネップ期ではあるが、農村壁新聞をあつかった浅岡論文もセルコル運動の背景に農民と末端党員の深刻な対立関係において議論を展開しており、またロシア革命期「県市合同」を扱った池田論文は、農村統治単位としての行政都市化—その裏返しとして都市の農村緊縛—を強調する。これらの論考は奥田の「農村コムニスト論」の史的な伏線として読めなくもない。ただしロシアの場合、同じく末端党職員の暴力といっても、「クラーク清算」が単なる財産没収や村落追放レベルから「絶滅＝銃殺」まで飛躍してしまう点に問題の深刻さがあると私には思われる。時空が異なるので単純な比較はできないが、たとえば同じく農村におけるスターリニズムの発現であっても戦後東独の大農弾圧（1952-53年）は、農場接収と村落追放までであり銃殺などは考えられないからである。農民対農村コムニストの二項対立図式だけでは、暴力次元のこの飛躍をどうにも理解できないのである。

第三に、もう一つの視点が、30年代の権威主義的なパターンリズムに関する議論である。といってもこの点を自覚的に主題化した論文は収められていない。しかし、たとえば非常措置から集団化期の赤軍兵士を扱ったタルホフ論文では、農民たちが兵士たる息子たちに手紙類などを送付することで赤軍から支援を引きだそうとしたこと、その結果、当該期に赤軍のなかに「農民的気分」が広汎に醸成されたことが明らかにされている。ただし、それが赤軍のありようや集団化の実力行使にどう作用したかの分析はなされていないが。パターンリズムによる暴力作用という点でもっとも興味を引いたのは、「最良のコレクター」たる突撃作業員を論じたグルムナーヤ論文第2節である。ここでは、第一に突撃作業員が農村現場における「権力の手先」であると同時に、日々現場で肉体生産に従事し、かつ識字率も低いなどコレクターの農民的共同性を共有する存在であったこと、第二に地方党委員会第一書記との文通を通して彼らのコレクターに対する影響力は高く、他方でこれにより第一書記の権威も著しく向上したことなどが指摘されている。さらに、ウラル農村において1930年代に農村指導層の著しい交代が起きていたとの指摘点を考え合わせれば（コレクター論文544頁）、第一書記と突撃作業員隊のパターンリズムが、その裏側で末端党官僚の粛清に連動していた可能性が相当高いと推測される。論理的飛躍であることを承知でいえば、私はこうしたダイナミズムに、冒頭で述べたE・トッドのいう「共同体家族」、つまり「平等主義」に基づく「権威主義」の具体的な発露をみた思いがした。むろんコンドラーシンのいう支配の多層性を十分認めた上での話だが、「共同体家族」原理は飢餓対応のモラルエコノミー的な側面だけではなく、それ以上に自発的な暴力の行使の局面にも関わらせて議論可能ではないか。そこに「貧農の暴力」などの階級論的な視点をこえてロシア的な民衆的暴力を理解する糸口があ

るのではないか。付言すれば、こうしたパターンリズムの作用は、官僚制が最大限に動員される戦後東ドイツの社会主義化とは好対照をなしていると思われた。

#### ④ おわりに

以上、主として「農民共同体」、「共同体と集団化」、「国家と農民」の三つの論点を中心に議論してきた。もとより新事実を豊富に内包する本書であれば、論じるべき論点はなお多い。最後に、残された紙幅で二点だけ触れることで、本書評の末尾としよう。

第一点は帝国と民族の問題である。これまで折に触れて強調したように、本書全体を通して浮かび上がるのは国家と農民の絶望的な距離感であるが、容易に想像されるように、これは「都市と農村の問題」であるとともに、帝国と民族の問題領域に重なるものである。そのさいとくに焦点となるのはウクライナである。本書においても内戦期のマフノー運動とその歴史叙述を扱ったコンドラシン論文からは、ウクライナの自立性を読みとることができるが、さらに集団化におけるウクライナの大飢饉（これをめぐる歴史論争を含む）、および本書では言及されていないが、独ソ戦時のナチス占領、ホロコースト、戦場化の問題までも射程にいれれば、ウクライナ史は、帝国史を越えて東欧史全体のうちに位置づけ直す必要があると思われる。

第二点は戦後農業史についてである。戦後のコルホーズの変化は従来まったく論じられたことのない新しい領域である。松井論文は、逃亡問題、付属地割当問題、給与支給問題の三点に関する検討から、1950年代においてコルホーズの一方での脱農民化(企業化)と他方での社会的機能の拡大が同時に進行したことを明らかにしている。ただしこの史実をいかに評価するかに関しては、研究蓄積の浅さによる制約のためであろう、「封建制／資本主義」、「近代／前近代」という近代主義の対概念の動員を余儀なくされている。1960-80年代の農村の変化を論じたナウハツキー論文も、近代主義の枠組みに依拠した記述に終始している。ただし農業の資本集約化の進展に伴ってカードル層の意義が増したこと、にもかかわらず農村社会資本不足のためにカードル不足問題が解決せず、もって大規模農業資本の機能不全が生じたという指摘など、個々には興味深い事実が述べられているが、いずれにしても戦後期に関する本格的研究の深化こそは、今後の「20世紀ロシア農民史」研究領域の大きな課題であろう。

最後にポスト・ソヴェト期の二論文、すなわち土地改革の困難さと今後の土地なし層の大量出現を示唆する野田論文と、潜在失業的要素をもつ農村貧民の特性を計量的に分析した武田論文については評者の力量不足のためにまったく言及できなかった。ご寛恕を乞う次第である。

あだち よしひろ (京都大学農学研究科准教授)